

英語に変換できない日本語の表現様態について

俳句とハイクを材料にして

On Some Types of Japanese Sentences that cannot easily be translated into English
—sampling several original Haikus and translated ones

岩垣 守彦

Morihiko Iwagaki

なし

Freelance

Abstract

Linguistic communication is usually achieved by combining nouns and verbs in the pattern of 'Subject + Predicate'. Japanese also uses them in the same pattern, but Japanese has some peculiar patterns of the combination: In Japanese, nouns and verbs are used many times in the form of 'Topic x Example (=Subject + Predicate)'. And moreover, this type of sentences can sometimes be changeable to 'Subject + Predicate' sentences, so the translation of Japanese into English is sometimes very difficult. I'm going to explain the difficulties of Japanese/English translation, sampling several original Japanese Haikus and translated ones.

1. 「俳句」と「英語ハイク」

俳句の中には英語に翻訳し易いものもある。たとえば、

椿落ち鶏鳴き椿又落ちる（梅室）

One camellia falls,

A cock crows,

Then another falls.

（星野恒彦編著『四季の歓び 名句に英訳をそえて A. ピニング
トン, 星野恒彦 共訳』(p.12 銀の鈴社, 鎌倉, 2009/10/15)

のように、この俳句のリズムは「椿落ち・鶏鳴き
椿・又落ちる」であるが、文構造は「椿落ち・鶏
鳴き・椿又落ちる」のように三つの「主部
(Subject) + 述部(Predicate)」から出来ている。こ
のような俳句は英語への変換が可能である。しか
し、英語に翻訳された俳句の多くは、助辞を変え
たり加えたりして訳したものである。たとえば、

かれ朶に烏止まりけり秋の暮（芭蕉）

On a withered branch,

A crow perched,
In the autumn evening. (translated by R.
H. Blyth)

秋の夜や旅の男の針仕事（一茶）

Late at night in autumn

A traveling man is busy

Patching.

など。は を「かれ朶に烏止まりけり秋の暮
(に)」のように助辞を加えて翻訳したもので
あり、は を「秋の夜や(に)旅の男の(が)
針仕事」と助辞を変えて翻訳したものである。
つまり、助辞を変えたり加えたりして英語の文構
造「主部 + 述部」に変換しないと俳句を英語に翻
訳することはできないのである。それは B.H.
Blyth が日本語で詠んだ句を英語にしたハイクを
見るとわかる。

R. H. Blyth は数多くの俳句や川柳を英語に訳し
ているが、彼自身も俳句を二句詠んでいる。最初
の一句は

葉の裏に青い夢みるかたつむり

で、もう一句は辞世の句として知られている

さざんかに心残して旅立ちぬ

である。そして、彼は最初の句を次のように英語ハイクにした。

A snail
Dreams a blue dream
On the back of a leaf. (R. H. Blyth)

R. H. Blyth は日本語の俳句では最後に置いた「かたつむり」を、英語に訳す時には文頭に置いて「主部 (A snail) + 述部 (Dreams a blue dream/ On the back of a leaf.)」としている。

元の俳句を「主部 + 述部」の英語の構造になるように助辞の追加・付け替えをすることによって生じることは、情報伝達における「比重の移動・消滅」である。たとえば、先に挙げた を に変えると、 の「秋の暮れ」(主題)と「かれ朶に烏止まりけり」(事例)との積算関係が消滅して、伝達情報の比重が主部(烏)に移って烏の描写になってしまう。 を にすると、「秋の夜」(話題)と「旅の男の針仕事」(事例)との積算関係が消えて、主部(旅の男)に情報の比重が移ってしまっ状況描写になってしまう。 を に変えると、 の「かたつむり」(話題)が主部になって「葉の裏に青い夢みる」(事例)との積算関係が消滅する。したがって、いずれの場合も、元の「俳句」とはまったく異質の「英語三行ハイク」になってしまう。これは、日本語の論述様態は英語の論述様態とは異なっているということである。

2. 日本語の論述様態と英語の論述様態

「表層」に現われる「単語」の中心は、日本語でも英語でも、文法的には、「名詞」と「動詞」である。ただ、その組み合わせ方が英語と日本語では異なる。英語の論述様態の基本構造は

(準単位情報+)【単位情報】S名詞(+関係代名詞節)+P動詞{(+C名詞/形容詞/O名詞

(+関係代名詞節)(O名詞(+関係代名詞節)/C名詞/形容詞)}(+準単位情報)

であるのに対し、日本語の論述様態の基本構造は

【話題】([連体節+)名詞](+[連体節+名詞])(+[連体節+名詞])(+動詞)×【事例】([連体節+)名詞])(+[連体節+名詞])(+[連体節+名詞])(+動詞)

である。たとえば、

「海は広いなおおきいな。月が昇るし日が沈む。」

「お昼 食べた？」

「旅は道連れ、世は情け。」

「象は鼻が長い。」

「[太郎が食べた]花子の弁当はおいしそうだった。」

など、上の日本語の基本的な論述様態から出来ている。ただ、日本語では、「主部S+述部P(C/O/OO/OC+V)」の構造も単独で使ったり、「話題T×事例E(主部S+述部P(C/O/OO/OC+V))」のようにダブらせたり潜在させたりして使うので、潜在している要素を表層化すると英語の文構造に対応させて変換することが可能である。たとえば、

「(あなたは)お昼(はを)食べました(か)?」

“Did you have lunch?”

のように、しかし、 から の文はそのまま機械的に英語に変換することができない。これらの文は、日本語特有の論述様態

「話題×事例」(旅は道連れ、世は情け)

「話題Tは×事例E(Sが)+述部VCである」(象は鼻が長い)

「事例×話題」「連体節+名詞」(太郎が食べた花子の弁当)

が使われているからである。そして、俳句がそのまま英語に訳すことができないのは、この三つの日本語特有の構造を母胎としているからである。

3. 機械的に変換できない日本語の論述様態

上の三つの文 が定型的に英語に変えにくい理由を考え見る。

の「旅は道連れ、世は情け」(A good companion on the road, / And love to lighten life's load.) は表層的には「SはCである」が二つ並置されているように見えるが、情報の比重は後半にあり、「旅と言うと道連れが必要であるように、人の世には情けが必要だ」という含意である。したがって、英語の構造に変換すると As T1 is necessary to C1, so T2 is necessary to C2. という情報に相当する。同じ構造である日本文「花は桜木、人は武士」(The cherry among flowers, the samurai among men.) も、同じ英語の構造 As T1 is () C1, so T2 is () C2. で対応できるが、含意を機械的に処理してカッコに適切な形容詞を入れることはほぼ不可能と言わざるを得ない。

の「象は鼻が長い」(話題T(象は)×事例E(主部S(鼻が)+述部VC(長い))も機械的に処理することはできない。「TはSがCである」に対応する英語の構造としては「T+be+C+in(point[respect]of)+S」という構造がある。「彼は体が丈夫である」は He is strong in health. また「彼は常識が欠けている」は He is lack in common sense. など。しかし、「象は鼻が長い」を *Elephants are long in nose. とは言うことができない。普通は Elephants have a long nose. と訳す。これで日本語の情報はほぼ等価的に伝達できているが、「象は鼻が長い」という日本文の情報は「象と言えば鼻が長い」である。(三上章は「AはBだ。」は、英語の As for A, it is B. に対応すると考えていた。(『日本語の構文』p.39, pp.41-43))したがって、日本文の情報意図を含めて英語で言い換えると Speaking [Thinking] of elephants, it reminds me [makes me imagine] that they have a long nose. に近い。

の「太郎が食べた花子の弁当はおいしそうだった」(Hanako's packed lunch looked good as

Taro ate.) は「話題×事例」が「主部+述部」(Hanako's packed lunch looked good.) と変えることができるが、話題(=主部)「花子の弁当」には連体節「太郎が食べた」が付随している。「連体節+名詞」は英語の「名詞+関係代名詞節」と構造的に似ているが、「連体節+名詞」の「太郎が食べた花子の弁当」の場合、花子の弁当は一個と想定するのが普通である。しかし、Hanako's packed lunch Taro ate(名詞+関係代名詞節)にすると、花子の弁当は複数個あったことが前提になる。したがって、たとえば、

「1949年に二度目の渡仏をした藤田嗣治」

*Fujita Tuguharu who visited France for the second time in 1949

と変換すると、「1949年に二度目の渡仏をした藤田嗣治」と「1949年に二度目の渡仏をしなかった藤田嗣治」が想定されることになり、同一人が同時に二カ所に存在するという矛盾が生じることになる。この問題をどのように処理するか。

4. 「連体節+名詞」の処理

「連体節+名詞」の「名詞+関係代名詞節」への対応に関しては、次の二つの問題を考えなければならないように思われる。一つは、「名詞+関係代名詞節」で訳すことの出来るケースの識別。もう一つは、R.H. Blyth が俳句の英訳でしたように、「連体節+名詞」を普通の文に訳して、後は「つなぎ+代名詞」で対応することができるか。

人間による翻訳例を点検調査すると、次のようなルールは見えて来る。

「連体節+不可算特定名詞・代名詞」は「不可算特定名詞・代名詞+関係代名詞節」で変換すると非文になる。

三年ばかりニューヨークで暮らした私には、国際人になるということがどんなに大変なことかわかる。

*I who has once lived for three years or so in New York know....

Having once lived for three years or so in New York, I know

「連体節 + 特定・不特定可算名詞」は「特定・不特定可算名詞 + 関係代名詞節」として使うことができる。

彼女は持って来た平たい紙包みを差し出した。
She held out a flat paper parcel she was carrying.

「連体節 + 名詞」の情報が「いつものこと」を表している場合、対応する「特定・不特定可算名詞 + 関係代名詞節 + 現在時制」は「特定・不特定可算名詞 + 現在分詞」に替えることができる。

「この海に見える丘は、兄がよく絵を描きにきた
“This hill looking out on the sea is the place where my older brother would often come to paint.”

「連体節 + 名詞」の情報が be+ing/ be+ed で表すことの出来る場合には「関係代名詞 + be 助動詞」を省いて「特定・不特定可算名詞 + 現在分詞・過去分詞」に替えることができる。

「揺りかごで眠っている赤ちゃんをみてごらん」
Take a look at the baby sleeping in the cradle.

「舶来氷だ」と雪森厚夫は言った。「オホーツク海の北で凍った氷が流されてきたんだね。」

“Specially imported ice,” said Atsuo. “It's ice formed in the north of the Okhotsk Sea that's drifted down here.”

最後の例では、前から順に単位情報を英語に訳すための「つなぎ」として連体節ではないところで「関係代名詞」が使われている、したがって、R.H. Blyth が「連体節 + 名詞」の俳句を「主部 + 述部」に訳したように、普通の文に変えて変換するとか、上の例のように「連体説」や「関係代名詞節」を「つなぎ」の一種ととらえて、「単位情

報 + つなぎ + 単位情報」の観点から日英両語の対応関係をとらえなおすことができると思われる。

参考文献

[岩垣守彦(2003)] 「連体修飾つき日本文の変換処理について」『自然言語処理』情報処理学会研究報告 2003-NL-156

[岩垣守彦(2003)] 「日本文の「つなぎ」と英文の「つなぎ」の対応に関して」情報処理学会研究報告. 自然言語処理研究会報告 2003(57), 25-30, 20030526

[岩垣守彦(2007)] 深層に沈んでいる感情を表層で波立たせる intertextuality の原点的考察 (071214 ことば工学, 阪大)

[岩垣守彦(2008)] 「読む」とは「創る」こと「表現技巧」について (ことば工学 (神奈川大 2008/3/28))

[岩垣守彦(2008)] 「日本語における感情喚起の表現をデータ化する」(2008/06/14, 人工知能学会全国大会ワークショップ (旭川))

[岩垣守彦(2008)] 「受け手の心に感情を喚起させる「言葉のデザイン」 俳句の場合」(2008/10/31, ことば工学, 武蔵野美大新宿キャンパス)

[岩垣守彦(2009)] 「古池に蛙が飛び込んだら俳句にならない 感覚情報を伝達するための技巧」(09/06/17, 人工知能学会ワークショップ (ことば工学) 高松)

[現代俳句協会 (編) (2008)] 『日英対訳 21 世紀俳句の時空』(永田書房, 東京, 2008/09/25)

[佐良木 昌・岩垣 守彦(2010)] 「関係節を用いない、連体節の英語への変換パターン - 情報の比重を連体節の英訳方法に取り込む - (電子情報通信学会「思考と言語」研究会, 2010/02/06 機械振興会館, 東京)

[永田 龍太郎 (編)] 『HI (HAIKU INTERNATIONAL)』(月刊, 国際俳句交流協会, 東京)

[星野恒彦 (編・著) (2009)] 『四季の歎び 名句に英訳をそえて A. ピニングトン, 星野恒彦共訳』(銀の鈴社, 鎌倉, 2009/10/15)

[吉村侑久代(1996)] 『R・H・ブライスの生涯 禅と俳句を愛して』同朋舎出版 東京 1996/06/22)